

## 文学と建築

ベン・ジョンソンのウィトルウィウス解釈をめぐって

山 田 由美子

## Summary

### Poetry and Architecture: Ben Jonson and Vitruvius

Yumiko Yamada

Jonson's concern for Vitruvius, especially in his satire against Inigo Jones, has rarely been related to his own neo-Aristotelian literary principle. Although their feud was sometimes attributed to the difference in their philosophy, there has been little convincing evidence on both sides. The most recent discussion of this matter by A. W. Johnson is regrettably biased by the author's mistaken favour of Platonism.

In Renaissance Italy, the discovery of the manuscript of *De architectura libri decem* involved the reconstructions of the ancient theatre for the purpose of representing classical plays reinterpreted in the light of the newly arrived Greek manuscript of Aristotle's *Poetics*. Most editors interpreted Vitruvius from the viewpoint of Aristotelian philosophy as a whole. The crucial point in their interpretation was the application of the metaphorical meaning of "architectonikē" in the *Nicomachean Ethics* to the art of politics.

Jonson was the first in England to apply the Vitruvian method to a triumphal arch in *The King's Entertainment* (1604), and Jones was the first architecture to introduce the Roman style into English buildings. Both of them owned their own copies of Vitruvius, and read them closely, in relation to the *Nicomachean Ethics*.

The article reexamines their annotations in the margin of *De architectura libri decem* to see how they agree or disagree with each other; how Jones's copy of Barbaro's Italian version misguided him to neglect the importance of the significance of history and the importance of natural philosophy to an architect; how Vitruvius's notion of *decor* derives from the Aristotelian *mimēsis* or imitation. It will be proved that Jonson's criticisms of Jones consisted in the latter's mysticism through misinterpretation of Vitruvius, which Jonson feared might lead in time to the corruption of the nation, when a "mind darkened by imperfect standards of taste" was indulging and misguiding its people with insubstantial fancies.

文学と建築——この一見何の関係もなさそうな二つの分野が、ルネサンス期のイタリアでは密接に結びついていた。14世紀末に古代ローマへの関心の高まりと共に起こった古典演劇復興の気運は、1427年のドイツにおけるプラウトゥス (Titus Maccius Plautus) の戯曲12篇の発見、1453年のコンスタンチノーブル陥落によるアリストテレス (Aristotle) の『詩学』(Poetics) のギリシア語写本の到来によって決定的なものとなり、世紀半ばの印刷術の発明によって、一気に波及する。イタリア各地に起こったこの運動で注目されるのは、それが文献研究だけでなく、実際の上演と劇場の再構築まで含んでいたことである。

その大きな原因となったのが、1414年に発見されたウイトルウィウス (Marcus Vitruvius Pollio) の『建築十書』(De architectura libri decem, 25 BC) の稿本である。この書物は、建築を単なる技術だけでなく、修辞、絵画、数学、歴史、哲学、音楽、医学、法学、天文学など、自然・人文科学の集大成として捉えなおしていることから、ただちに人文主義者たちの注目するところとなった。1484年にアルベルティ (Leon Battista Alberti) が『建築十書』を復刻出版すると、ジョコンド (Fra Giocondo)、セルリオ (Sebastiano Serlio)、バルバロ (Daniele Barbaro) などが、古代劇場の再構築を試みる。現存する最古の文芸批評書『詩学』に則って再解釈され古典劇を、最古の建築書である『建築十書』に従って復元された劇場の中で、本来あったはずの形で上演しようというのが、イタリアにおける新アリストテレス主義運動の特徴であった。

古典劇と古代建築の組合せは、少し遅れてイギリスにも波及する。ジェームズ一世 (James) 治下の「桂冠詩人」ベン・ジョンソン (Ben Jonson) は、それまで「無政府状態」に等しかったイギリス演劇に大陸並み整然とした古典規範を本格的に導入した功績をもつが、<sup>(1)</sup>1604年の『国王の歓待』(The King's Entertainment) の凱旋門において、ウイトルウィウスの建築概念を初めて英国で応用した人物でもあった。<sup>(2)</sup>

実際の建築においてローマ風の端正なスタイルをイギリスにもたらしたのは、英国初の「建築家」イニゴ・ジョーンズ (Inigo Jones) である。<sup>(3)</sup> イタリア各地を中心にヨーロッパを周遊し、ウイトルウィウスの流れを汲むパツラーディオ (Palladio) 主義とセルリオの遠近法を習得したこの建築家兼舞台芸術家は、1605年からジョンソンと組んで仮面劇の共同制作にとりかかる。『建築十書』を解する「国家的詩人」ジョンソンと、その理論を実践に移す建築家ジョーンズの組合せは、イタリアのトリッシーノ (Giangiorgio Trissino) とパツラーディオを連想させるものであった。

ところが二人の協力体制は、仮面劇の主導権をめぐって14年後に破綻を迎える。1611年頃からジョンソンはジョーンズの功績に言及することを拒み、以来公私にわたって非難を浴び続けた。1631年には、仮面劇『愛の凱旋』(Love's Triumph through Callipolis) と、同年の『ク

ロリスの仮面劇』(Chloridia)の台本における両者の名前の記述方法についての争いがあり、それまでに勢力を高めていたジョーンズが、ジョンソンを王室仮面劇の制作から永久に締め出すことになる。

確執の詳細はさておき、<sup>(4)</sup> その後のジョンソンの言動から、ウイトルウィウス解釈をめぐる両者の食い違いがその一因になっていることは間違いなさそうである。1633年の喜劇『桶物語』(A Tale of a Tub)に、ジョンソンはジョーンズのパロディとして「ヴィトルヴィアス・フープ」(Vitruvius Hoop)という人物を用意し、それが阻止されると、<sup>(5)</sup> 翌年ニューカスル(Newcastle)伯が国王チャールズ(Charles)歓迎のために準備した仮面劇『ボルゾーヴァ城の愛の歓待』(Love's Welcome at Bolsover)に「イニクォー・ヴィトルヴィアス隊長」(Colonel Iniquo Vitruvius)を登場させる。ジョーンズを「ヴィトルヴィアス」と呼ぶのは、ジョンソン一流の皮肉であり、諷刺詩「イニゴ・ジョーンズへの諫言」(“An Expostulation with Inigo Jones,” *Ungathered Verse* 34)では、ジョーンズをウイトルウィウスという名の資格なき篡奪者として批判している。<sup>(6)</sup>

しかしながら、建築は特殊な専門技術を必要とする分野である。文学者のジョンソンが、建築家のジョーンズを、他ならぬ建築の部門で攻撃することにどのような意義と根拠があったのだろうか。イタリアでは、劇場の再建と演劇の再現が切り離せなかったというが、現代の通念からすると、劇場の建設を含む建築それ自体が、文学としての演劇の本質とそれほど深く関わっているようにも思えない。

ジョンソンは、フィランドリエ(Guillaume Philandrier)版とバルバーロのラテン語版を所有し、前者を熟読した形跡を残している。<sup>(7)</sup> また、その文学論の集大成ともいべき『発見』(Discoveries)には、ウイトルウィウスからの引用が何箇所も見られる。一方イニゴ・ジョーンズの方は、パッラーディオの図版の付きのバルバーロのイタリア語訳(1567)を精読していた。<sup>(8)</sup>

本稿では、ジョンソン文学の観点から、『建築十書』に残された両者の書き込みを読み直すことにより、これまで十分に解明されていなかった新アリストテレス主義演劇理論とウイトルウィウスの建築理論との関係を考察してみたい。<sup>(9)</sup>

## 2

ジョンソンの諷刺詩「イニゴ・ジョーンズへの諫言」の書き出しは、以下のようになっている。

総監督官殿、鍋釜に貯めこんだ

30ポンドから身を起こし、今のご身分になられたお方。

鍋と釜から飛び出した建築家先生(Architect)が、

今やユークリッドの講義もおできになる。

ユークリッドどころかアルキメデスの誤りまで正し、  
人類最高の技術者であるアルキュタスをこきおろし、  
クテシビオスを従え、<sup>(10)</sup>ウイトルウィウスから  
出鱈目に名前を取り出しては、われわれを威圧なさる。  
アリストテレスの威光を借りて、  
「棟梁の術」(Architectonice)を披露される。(1-10行)

この詩のジョーンズは、鍋釜に貯めこんだ 30 ポンドを元手に一挙に王室付の建築総監督官に成り上がったという。しかし、建築家というものは、誰もが突然なれるものではない。

「建築家」とは、一大都市を築き上げるだけの能力をもつ人物をいう。城壁を廻らし、その中に住宅はもとより要塞・神殿・広場・劇場・浴場などの公共施設を、地勢や気候条件も考慮に入れて設計施工しなければならない。また戦時に備えて敵方の都市全体を破壊する大がかりな機械装置を発明することも要求される(『建築十書』1.3.1。<sup>(11)</sup> そのために建築家は、学識をもち、素描技術にすぐれ、幾何学、歴史、哲学、音楽、医学、法学、天文学の各分野に通じていなければならない(1.1.3)。子供の頃から諸芸・諸学の厳しい修練を積み上げた者だけが、「崇高な建築の神殿に到達し、晴れて建築家を名乗ることを許される」とウイトルウィウスはいう(1.1.11)。

ジョーンズが標榜しているのは、まさにこのような総合的な知識と技術を備えた「建築家」である。ユークリッドを論じ、アルキメデスやアルキュタスを批判し、クテシビオスを凌駕しようとする。そしてついには「人類最高の哲学者」<sup>(12)</sup>アリストテレスのいう「棟梁の術」を極めたい。

『建築十書』の稿本が発見されたとき、その題名からただちに連想されたのは、『ニコマコス倫理学』(Nicomachean Ethics) 第1巻第1章の「棟梁の術」(architektonikē)という語であった。<sup>(13)</sup> 「建築家」(architektōn)の語源は、「大工」・「職人」(tektōn)の「頭」であり、多数の職人を監督しつつ多岐にわたる技術をまとめあげるこの「棟梁の術」を、アリストテレスは、比喩的に「あらゆる技芸、学問を統括する主要な技術または学問」という意味で用いている。<sup>(14)</sup>

アルベルティも、バルバーロも、共にアリストテレス哲学の体系的な理解に基づいてウイトルウィウスの解釈を行った。バルバーロは、『ニコマコス倫理学』と『修辞学』(Rhetoric)のラテン語版の編集も手掛けている。<sup>(15)</sup> ジョーンズ自身、こうした傾向を反映し、セーニ(Bernardo Segni)訳の『ニコマコス倫理学』に書き込みを施しつつ精読していた。<sup>(16)</sup>

『ニコマコス倫理学』の「棟梁の術」は、最終的に「政治学」(politikē)を指す。アリストテレスによると、人間の諸々の営みの究極の目的は、「最高の善」(to ariston)すなわち「幸福」(eudaimonia)にある。そして「行動」(praxis)を通じてこれを具現するのがあらゆる技術、研究、行為、選択を統括する術としての「政治学」であるという(第1巻第2章、第3章、第7章)。ジョーンズも、この点を強く意識し、建築や仮面劇の制作を通して、政治哲学的な

影響を及ぼすことを最終目標としていた。<sup>(17)</sup>

都市国家の基盤を築き上げる「建築家」が、ありとあらゆる技術と学問の「棟梁の術」である「政治学」を駆使して、自ら作り上げた容れ物を充実させる——まことに壮大な構想ではある。しかし、ジョンソンの詩によると、ジョーンズは、ウィトルウィウスから名前を間違っただけで引用するなど、学問の基礎が覚束ないらしい。

ジョーンズがモデルとされている『磁力を帯びた婦人』(*The Magnetic Lady*) のダムプレイ (Damply) は、タイトル中の “Magnetic” の語源がラテン語の形容詞 “magnus, magna, magnum” であるものと勘違いし (Ind. 74-78)、『桶物語』の「ヴィトルヴィアス・フープ」改め「イン・アンド・イン・メドレー」(In-And-In Medley) は、“ad infinitum” を “to *Infinito*” と言いつつ間違える (5. 7. 11-12)。織工を父とし、指物師の徒弟から腕一本で成り上がったジョーンズは、<sup>(18)</sup> 留学先で覚えたイタリア語は別として、ラテン語を習得する機会に恵まれなかった。ルネサンス期において、諸芸・諸学を積み上げるための第一歩はラテン語習得にあったが、ジョーンズにはこれができずとジョンソンはいうのである。

建築理論はさておき、総監督官としての実際の仕事はどのようなのだろうか。ジョンソンは、「イニゴ・ジョーンズへの諫言」の補足として書いた諷刺詩「侯爵候補のイニゴへ」(“To Inigo, Marquess Would-Be: A Corollary,” *Ungathered Verse* 35) の中で、フェリーペ (Felipe) 四世から爵位を授与された建築家ジョヴァンニ・バッティスタ・クレシェンツィオ (Giovanni Battista Crescenzo) とジョーンズの業績について、次のような比較を行っている。

あちらは腕も頭も相当なもので、設計するのは  
数々の都市と寺院！お前の方は、葡萄酒や麦酒用の穴蔵造り！  
あちらは本物の宮殿を建てるとぞ！お前のは商品の陳列棚だよ、  
スライド式の板に、人工照明を当てただけ！  
あちらは広場の図面を引き、大通りを交差させる！  
お前が絵の具で描いた路地では、親指トムが落ち合うんだから！ (7-12行)

ブエン・レティロ宮殿 (Buen Retiro) の総工費は、英国通貨に換算して約 600,000ポンドであったといわれる。ジョーンズが建てたクイーンズハウス (Queen's House) とコックピット劇場 (Cockpit-in-Court)、王妃用の礼拝堂二つを合わせても 4,000ポンドから 7,500ポンドで、スペインの規模からすると、酒蔵程度の額でしかない。<sup>(19)</sup> ホワイトホール (Whitehall) 宮の祝宴館は火災のため、セントポール寺院 (St. Paul) は崩壊の恐れがあるための建て直しであった。アンリ四世のパレ・ロワイヤル (Palais Royal)、歴代教皇によるローマの大規模な再建などをもち出しても、<sup>(20)</sup> 彼我の差は一目瞭然である。一大都市を築き上げるのが「建築家」の条件といっても、仮面劇の書き割りでしかそれをしたことがないというのでは、話にならないとジョンソンは言う。

ジョーンズ以前に建築家と呼ばれる人物は、英国に存在しなかった。それまでは石工や大工

の親方が昔のやり方で建物を設計していたのである。ジョーンズは、イタリアの建造物を見学し、その様式を応用したにすぎない。ジョーンズの下働きをしていたニコラス・ストーン (Nicholas Stone) とジョン・ウェブ (John Web) に至っては、見よう見まねでジョーンズの仕事の仕方を覚え、建築家を名乗る有様であった。<sup>(21)</sup> ウィトルウィウスのいう建築家に匹敵するだけの人物がまだイギリスに誕生していないというのが実情のようである。

ただし、ここからジョンソンが大陸の壮大な建築群に憧れ、自国の王室の財政的窮乏を嘲笑していると結論づけるのは早計であろう。文学の分野でも、イタリアでは15世紀から諸都市に綺羅星のごとく人文主義者が輩出し、古典演劇がさかんに上演され、劇場建設の動きまで生じていたのに、ジョンソンが出現する以前のイギリス演劇は、前述したように「知性のかけらもない無政府状態に苦悶していた」のである。

ジョンソンは、権力を誇示する広大な敷地や豪華な建材・調度の類を建築に求めていたわけでは決してない。改築費用さえまかならない中世以来の古い屋敷に住むリズリー卿 (Lord Lisle) に捧げた詩「ペンズハーストに寄せて」(“To Penshurst,” *The Forest* 2) の中では、客を迎える居住者の優しさと住み心地のよさを第一に讃えているからである。

さらに、ジョーンズのラテン語の知識の欠如についても、額面通りに受取るのは早計かもしれない。徒弟上がりで教養がないという点では、ジョーンズが手本としたパツラーディオも同じ境遇にあった。<sup>(22)</sup> シェイクスピア (William Shakespeare) に対する「わずかなラテン語と、それより乏しいギリシア語しか知らぬ」という批判に、文学理論の根本に関わる重大な問題が隠されていたことは、筆者が別の機会にすでに検討した通りである。<sup>(23)</sup> ジョーンズの場合、ウィトルウィウスをイタリア語でしか読めなかったことで、ジョンソンから見た「不都合」が生じたとも考えられるが、はたして建築家の語学力が、その建築様式に何らかの影響を及ぼすものであろうか。

### 3

ジョーンズは一般にパツラーディオの古典主義建築をイギリスに導入・定着させたと言われている。しかし専門家の間では、ジョーンズの「パツラーディオ主義」は、差し引いて考える必要があるというのが定説になっている。実際は、アルプス以北の土地で初めてパツラーディオ風デザインを建築に取り入れたという程度のことらしい。<sup>(24)</sup> パツラーディオを含むルネサンス期イタリアの建築家のほとんどがウィトルウィウスの影響を蒙っていたのに対して、<sup>(25)</sup> ジョーンズは、簡素さを旨とするローマ様式を徹底させた点で、彼らと決定的に異なっていたというのである。<sup>(26)</sup>

1613-15年の二度目のイタリア旅行で、ジョーンズは、パツラーディオが独自に書いた『建築四書』(*I Quattro libri dell'architettura*, 1570) を入手し、それを片手に、ヴィチエンツァでその建築作品の現地研究を行う。<sup>(27)</sup> ところが興味の対象がやがてルネサンス建築から古代ローマの神殿に移り、当初予定していたよりも長くローマに滞在したようである。<sup>(28)</sup> そのきっかけ

けとなったのは、パツラーディオが実測調査したローマの古代神殿の復元図とその解説にあてられた『建築四書』の第4書ではなかったかと思われる。そして、このためジョーンズは、おそらくそれとは気付かぬままに、ウィトルウィウスの建築理念から大きく遠ざかってしまったようなのである。バルバーロの註釈書に図版を提供していたパツラーディオの方は、非ウィトルウィウスの帝政後期のローマ建築を扱う際にも、ウィトルウィウスの古典主義精神を見失うことはなかった。<sup>(29)</sup>

ウィトルウィウスが活躍したのは、アウグストゥス (Augustus) 時代 (前27年-後14年) であるが、ローマよりもヘレニズムの伝統に属するグレコ・ローマン派であった。したがってその建築論は、古代ギリシア建築法が主体になっている。<sup>(30)</sup>

ハーシー (George Hersey) の『古代建築の失われた意味』 (*The Lost Meaning of Classical Architecture*, 1988) によると、ルネサンス期の一部の編者が恣意的な削除を行ったために、ウィトルウィウスのヘレニズム精神が見過ごされるようになり、今日に至っているという。<sup>(31)</sup>

ウィトルウィウスの原本には、建物に柱の代わりに用いられるカリュアティデース (Caryatides) と呼ばれる女性の大理石像、また、ペルシア柱廊の柱上帯部分で屋根を支えているペルシア人捕虜の像、さらに柱頭の3様式であるドーリス式・イオニア式・コリントス式の歴史的由来とその意味が詳述されている (1.1.5-6, 4.1.1-12)。ところがこの部分が大幅に削除された結果、建物自体のもつ「意味」が「失われた」というのである。

ハーシーは、ルネサンス期にペルシア人捕虜の像の伝統を守った例として、チェザリアーノ (Cesare Cesariano) 版ウィトルウィウスに準拠したミケランジェロ (Michelangelo) を、また、柱の3様式の意味を復活させた例として、註釈も手掛けたフランチェスコ・ディ・ジョルジオ (Francesco di Giorgio) を挙げている。

ここで興味深いのは、ジョーンズが、ミケランジェロの設計による建築の外部装飾を、過剰すぎると批判していることである。ジョーンズのいわゆる「ローマン・スケッチブック」 (Roman Sketchbook) のメモには、「ミケランジェロとその一派が導入した」「複雑なデザインの幻想的な装飾」が「建築物の基本構造部分や邸宅のファサードに似つかわしくない」という記述が残されている。<sup>(32)</sup>

前述したように、ジョーンズが所有していた『建築十書』は、バルバーロのイタリア語版であった。しかしバルバーロの註釈書からは、ラテン語版・イタリア語版共に、柱の様式の由来に関する説明が大幅に省略されている。<sup>(33)</sup> そのためジョーンズは、ミケランジェロの外部装飾の意味を理解できず、外見の複雑さだけを見て、建物の外観を損ねる余計な付属物にすぎないと断定してしまったらしい。

これに対して、ジョンソンが精読したフィランドリエ版『建築十書』の方には、柱の様式についての説明がかなり残されていた。<sup>(34)</sup> 前出のカリュアティデースの大理石像と、ペルシア柱廊の捕虜の像の部分にジョンソンは下線を施し、特に後者が「自由の擁護」という政治理念を表すことに関心を示している。<sup>(35)</sup> ウィトルウィウスが建築家の必修学科の中に歴史を加えたのは、伝統的な装飾の意味を理解し、それを正確に用いることによって、建造の目的を



明らかにするためであった（『建築十書』1.1.5-6）。<sup>(36)</sup> 外部を極力簡素化したジョーンズの建築物から、歴史的意味合いも同時に失われてしまったことをジョンソンは見逃さなかったはずである。

先に引用したミケランジェロの装飾批判を、ジョーンズは次のように締めくくっている。

そうした装飾は、庭の回廊、化粧漆喰部分、マントルピース、もしくは室内にこそ必要で、似つかわしい。理性ある人物は誰しも、公共の場において、ひたすら威厳に満ちた体面を保つようにする。想像力を解放し、はめをはずして、本能のなすがままに狂喜し、驚き、笑い、考え込み、恐怖に怯えるのは心中ひそか行うのである。したがって建築においても、外部の装飾は、古典様式に従い、男性的かつ簡素に抑えるべきだが、建物の中や家具類は、古代の様式のキマイラその他、怪奇な装飾を思う存分用いればよい。<sup>(37)</sup>

ジョーンズの建築は、イタリア様式の極致といわれるホワイトホール宮の祝宴館に代表されるように、外層部は他に例を見ないほど徹底的に装飾をそぎ落としたストイックな造りになっている。一方、外部の簡素化で抑圧された「想像力」がはげ口を求めた結果、内部は、ジェイムズ一世のカタファルクやヘンリエッタ・マライア（Henrietta Maria）のための内装に見られるような、装飾過剰やグロテスク様式が目立っている。<sup>(38)</sup>

また前出の諷刺詩「侯爵候補のイニゴへ」で示唆されているように、建築総監督官としてのジョーンズの仕事は、建築部門よりも、仮面劇の衣装や可動装置を含む舞台背景の制作が主体となっていた。<sup>(39)</sup> ここにこそジョーンズの「想像力」が最大限に発揮できる機会があり、<sup>(40)</sup> 舞台におけるイリュージョンによる幻惑が、ジョーンズの最大の関心であり、主たる業績と言っても過言ではなかった。<sup>(41)</sup>

外的な体面を保ちさえすれば、内部はいくらはめをはずしてもよいとジョーンズは主張するが、ウィトルウィウスは、人間の心に窓をあけて、内部まで見通せるようにすべきだと述べている（『建築十書』3.序1）。しかも、ジョーンズが推賞している実物とはかけ離れた「怪奇な」絵画や装飾を、「不健全な判断力」の所産として、固く禁じている（『建築十書』7.5.3-7）。それがいかに芸術的にすぐれたものであっても、こうした「デコール」（decor）の欠如が個人の規模にとどまっているうちはともかく、公共の建造物に用いられた場合には、国民全体の知性が疑われかねないとウィトルウィウスは警告する。

『詩論』（*Ars poetica*）の書き出しで、ホラティウス（Horace; Quintus Horatius Flaccus）は、「詩的狂気」による詩を、人間の頭に馬の頸をつなぎ、あちこちから手足と胴を集めて、色とりどりの羽根をまとませた絵にたとえた。この箇所との関連で、ジョンソンは、人間や動植物を故意にデフォルメする壁画の流行を嘆くウィトルウィウスの言葉を紹介している（『発見』1567-71）。

ホラティウスの『詩論』は、アリストテレスの『詩学』と共に、ルネサンス期の新アリストテレス主義運動の核を成していた。建築作品に「真実らしさ」と有機的整合性を求めるウィト

ルウィウスの主張は、古典主義の演劇規範に通じるところがある。ジョーンズの手法は、ジョンソンの文学理念に関わる重大な問題が含まれていたのかもしれない。

#### 4

ウィトルウィウスは「怪奇な」絵画や装飾への嗜好が「不健全な判断力」を育てると警告したが、ジョーンズの場合も、それを免れることはできなかったようである。ウィトルウィウスの誤読から生じたジョーンズの「ローマ崇拜」が最終的に行き着いたのは、「ストーンヘンジ＝ローマ神殿説」であった。弟子のジョン・ウェブがまとめあげた『ストーンヘンジの復興』（*Stonehenge Restored*, 1655）によると、1620年にジェームズ一世から調査を依頼されたジョーンズは、巨石群は、古代ローマのトスカナ様式の神殿の廃虚であり、天の神カエルス（*Caelus*）を祭ったものであるという結論を下した。<sup>(42)</sup> これ以後ジョーンズは、憑かれたようにトスカナ様式を作品中に取り入れていく。<sup>(43)</sup>

ローマ建築を実測調査したパツラーディオは『建築四書』の第1書第4章で極限まで装飾を削ぎ落とした簡素な様式としてトスカナ式を紹介しているが、ヘレニズム主義者のウィトルウィウスは、このローマ式の柱について、歴史的由来の説明抜きで、ごく短い記述しか行っていない（『建築十書』4.7.1-5）。

ジョーンズの大きな「誤解」の背景には、ブリタニアの「建国神話」があった。ローマ建国の英雄とされるアエネアス（*Aeneas*）の親戚ブルトゥス（*Brutus*）が、新トロイアとしてのロンドンを築き上げ、その子孫がアーサー王（*Arthur*）だというものである。イギリスでは、16世紀に古物研究と地方地誌学が発達し、ヘンリー七世の即位と同時に、王家の権威付けと帝権擁立のプロパガンダとして、古物や古文書によって「ブルトゥス＝アーサー王伝説」を歴史的に「証明」しようという動きが盛んになった。王権神授説を唱えるステュアート王家（*the Stuarts*）の下で、この伝説を復活させるのがジョーンズの研究と実践の目的であった。

ああ見世物様、見世物様、無敵の見世物様！

それに饒舌な仮面劇殿！ 不滅のあなたがたを語るのに

散文、韻文、意味などは無用の長物。

国家の典範を視覚で具現しているのですから！ これぞまさしく

宮廷御用達の象形文字！ 厚さ1インチの板でできた遠近法の中に

すべての技芸学術が結集されているのですよ！

必要なのは「ポリティーク派」ばりの目敏さ。

その目は多彩な色の一つ一つに隠されている秘密を見抜き、

モミ板の隙間に描かれた神話の意味を解き明かす！

とにかく板切りに喋らせる！ 大変なものです。

塗装と木工が仮面劇の神髄というのですから。

.....  
ああ、この衣装係はどこまで増長するのだろう。

奴の名は「スケウオポイオス」、皆が知ってるはずだ。

大道具方、所詮

舞台背景と機械の担当、それなのに今や

音楽を取り仕切り、筋書きまで作り上げる。

奴は、全能の主のように君臨し、仮面劇のすべてを取り仕切ろうとする。

(「イニゴ・ジョーンズへの諫言」51-64行)

ジョンソンを制作現場から追放した後、ジョーンズは、筋書きや音楽にまで手を出し、あらゆる限りの図像学的知識を氾濫させ、セルリオから学んだ回転・スライド・昇降式の可動装置を駆使し、幻想効果を高めつつ「ステュアート神話」を現出させることに専念する。<sup>(44)</sup> そしてジョーンズがモデルとされている前出のダムプレイは、こうした「奇跡」こそが観衆を喜ばせる」とうそぶくのである(『磁力を帯びた婦人』1. Chorus 25)。

パッラーディオの代表作であるテアトロ・オリンピコは、ウイトルウィウスの記述に従った古風な造りで、ジョーンズの目指す権威付けのためのイリュージョン効果とはおよそ無縁であった。<sup>(45)</sup> 母体となるアカデミア・オリンピコそれ自体が、構成員を位階に従って区別する宮廷とは異なり、全員が対等な組織になっている。劇場の構造もこれを反映し、すべての座席から対等に5つの遠近法の背景が見える工夫がなされていた。<sup>(46)</sup>

ウイトルウィウスの劇場にも、聴覚の面でこれに類した配慮がなされている。舞台上で発音される言葉がどの席にも明瞭に届き、意味が間違っただけで伝わらないように、和音と音階に即して共鳴する青銅の壺を座席の下に配置しているのである(5.3.4-5.8.8)。『建築十書』のこの箇所印を付けたジョンソンは、<sup>(47)</sup> ここに「言語表現の基礎は正確にギリシア語を話すことにある」というアリストテレスの『修辞学』(*Rhetoric*)の精神が反映されていることを理解したに違いない(第3巻第5章)。<sup>(48)</sup>

哲学を体系的に学ぶ機会のなかったジョーンズにとって、アリストテレスの「棟梁の術」を標榜しながら、プラトン(Plato)のアイデアを同時に追求することは、何の矛盾もない行為であったらしい。<sup>(49)</sup> 前者は権威付けの手段、後者は究極の理想として意識していたように思われる。ともあれ『国家論』(*Republic*)や『饗宴』(*Symposium*)を引きつつ「美のアイデア」を論じ、ピュタゴラス(Pythagoras)の天球の音楽に思いを寄せていたにジョーンズは、<sup>(50)</sup> パッラーディオの即物的な発想に幻滅し、セルリオのイリュージョン装置に関心を移したのであろう。

しかしながら、神秘主義の払拭こそパッラーディオが模範としたウイトルウィウスの本領とするところであった。ウイトルウィウスがピュタゴラスやプラトンを讃えるのは、両者が土地割りや測量に必要な幾何学の方面で業績を挙げたからである(9.序4-8)。建築家が天文学を学ぶのも、正確な水時計を作るという、あくまでも実用的な目的のためであった(1.1.10)。

また、建築家になるための「必修学科」には哲学も含まれているが、その目的は、度量の大

きさと清廉な人格を養うことと、自然学 (physiology) をより熱心に追求する姿勢を育てることにある (1.1.7)。建築家にとっては特に後者が重要で、哲学を修め、自然の法則を会得していないと、クテシビオス、アルキメデス、およびこれに類した人々が書いた書物を理解できないという。

ここで想起起こされるのは、先に引用した「イニゴ・ジョーンズへの諫言」の中の「アルキメデスの誤りまで正し」、「アルキュタスをこきおろし」、「クテシビオスを従え」、「ウイトルウィウスから出鱈目に名前を取り出す」という一節である。ジョンソンは、ウイトルウィウスの「自然学」(physiologia) という語に着目し、この部分に“naturae ratio”というラテン語訳を書き込んでいた。<sup>(51)</sup>『建築十書』の同じ章にはアルキュタスも登場し、第9書では、アルキメデスの比重測定法、アルキュタスの立方体の倍量の計算法、クテシビオスの水時計製造法が科学的に解明されている。同じ箇所でも原子論的唯物論の立場から魔術や迷信を排斥したルクレーティウス (Titus Lucretius Carus) を、後世まで読み継がれるべき著作家として推賞するとき (9.序17)、ウイトルウィウスの立場は誰の目にも明白になる。

ジョンソンの詩行は、ジョーンズが哲学を修めず、自然の法則を会得しなかったがゆえに、「クテシビオス、アルキメデス、およびこれに類した人々」が扱う代数、幾何、物理、天文その他の諸科学の本質を理解しないまま、迷信や誤謬に陥ったことを批判しているのである。

ジョーンズのいう「奇跡」を排撃しようとするジョンソンの態度は、その文学理念と深く関わっている。パッラーディオの属するアカデミア・オリムピコを主宰していたトリッシーノが、アリストテレスの『詩学』の翻訳者でもあったことは、ウイトルウィウス主義と新アリストテレス主義のつながりを考える上で注目に値する。『詩学』は、現在でこそもっぱら文学との関連で論じられているが、ルネサンス期には、アリストテレス哲学の全体系に有機的に組み入れて解釈されていた。<sup>(52)</sup>

ジョンソンがトリッシーノを読んだかどうかは定かではないが、北方ルネサンスを代表するヘインシウス (Daniel Heinsius) の『詩学』注解書『悲劇の構造について』(De tragoediae constitutione, 1627) を通じて、ウイトルウィウスのいう自然学の重要性を十分に理解していた。この中で、ヘインシウスは、「技術は自然を模倣する」というアリストテレスの『自然学』(Physics) の言葉 (第2巻第2章・第8章) を引用しながら、自然現象に反した超常的手段で筋の紛糾の解決する「機械仕掛け」を、「技術の欠如」として厳しく非難している (第12章)。超自然的手段が有効であるかのような印象を観客に与え、誤った判断力を植え付ける怖れがあるというのである。<sup>(53)</sup>

バルバーロは、「技術は自然を模倣する」という言葉を『詩学』の「模倣論」(mimēsis) と関連させて『建築十書』の解説を行った。<sup>(54)</sup> この精神を継承したパッラーディオも、『建築四書』の中で「建築は他の技術と同じく、自然を模倣するものであり、自然の法則に反することは受け入れてはならない」と宣言している (第1書第20章)。アルベルティとバルバーロは、『建築十書』の中の天文学に関する部分が占星術の迷信に通じやすいという理由で警戒していた。<sup>(55)</sup> 柱の装飾に関する記述を削ったバルバーロの「勇み足」も、こうした合理主義精神の

なせるわざであったといえよう。バルバロを読んだイニゴ・ジョーンズが正反対の方向に走ってしまったのは、まことに皮肉なことであった。

以上概観したジョンソンの批判の主旨をまとめると、ジョーンズは、ウィトルウィウスを正確に読めないために建造物に正確な歴史を反映できず、「デコール」の法則を無視して内面と外面を乖離させて国民の不面目になるようなものを拵え上げ、自然科学の基本を学ばず迷信と誤謬に陥ったということになるであろう。問題は、これが一個人の「芸術上の逸脱」にとどまらなかったことにある。

前述したように、ジョーンズは、「純正な建築家」として『ニコマコス倫理学』第1章の「棟梁の術」を強く意識し、建築や仮面劇の制作を通して、政治哲学的な影響を及ぼすことを目標としていた。ところがジョーンズがウィトルウィウスの誤読から誤って辿り着いた「ブルトゥス＝アースー王伝説」は、優秀な歴史学者たちが、最新の古物研究と地方地誌学の成果を駆使して拵えあげた「妄想」ということで、諸外国の物笑いの種になり、イギリス国民を「不面目」に陥れていたのである。<sup>(56)</sup>

ウィトルウィウスが指摘するように、「怪奇な」絵画や装飾への嗜好は「不健全な判断力」を示唆する。そのような人物が、建築総監督官の立場から、回転・スライド・昇降式の可動装置や、象徴的図像の多用による幻惑効果を利用して、確信をもって誤謬に満ちた史観を広め、<sup>(57)</sup> 国全体を誤った方向に導くことにジョンソンは危惧を感じたのであった。

「建築」が国家の基盤を外的に築き上げる役割を負っているとするなら、「建築」が作り上げた容れ物を充実させるのが比喩的に「棟梁の術」と呼ばれる「政治学」ということになるであろう。そしてジョンソンの主張によると、「諸学の女王」(Artium Regina)<sup>(58)</sup> と呼ばれる文学こそ、「創作を通じて国家を構築する」学問であった。

哲学者だけが知を学び、神学者だけが敬虔を、政治学者だけが政治を学びうるなどとは到底考えられない。創作を通じて国家を構築することのできる人間（すなわち詩人）は、審議をもってこれを治め、法によってこれを強化し、審判をもってこれを正し、宗教と倫理をもってこれを陶冶することができる。したがって、詩人はこれらすべての学者に相当するといわねばならない。  
(『発見』1032-38)

ホラティウスによると、詩人の祖オルフェウス (Orpheus) が野獣を手懐けたという伝説は、野蛮で殺戮をくり返していた人類が、哲学、神学、法律により文明的な生活を送るようになった過程を寓意的に述べたものであるという (『詩論』391-401)。哲学、神学、法律は、健全な国家の維持に必要な学問であるが、専門に枝分かれした結果、本来の責務を果たせずにいる。総合的な見地から諸学の相互関係を見直し、各々の機能を修復することによって国家運営を正常な状態に保つことが、詩人に課された使命だというのである。

『建築十書』の稿本発見の約40年後にアリストテレスの『詩学』のギリシア語原典がもたらされたとき、この二つがただちに結びついたので、文学が建築の語源の「棟梁の術」を具現す

る学問であるという共通理解が、アリストテレスとホラティウスを主軸とする新アリストテレス主義者の間に成り立っていたからであろう。イタリア・ルネサンス期の古代劇場建設は、まさにこのような理念の実現を目指したものであり、ジョンソンがウイトルウィウスの正確な解釈に異常なまでに拘泥したのも、まさしく同じ理由による。

## 注

- 1) John Oldham, "Upon the Works of Ben Jonson. Written in 1678. Ode" qtd. in Craig 310.
- 2) Johnson 16-17. 製作は Stephen Harris and Higgotton.
- 3) ホワイトホール宮の祝宴館がそれに相当する。Gotch 7 を参照。
- 4) 原因として現在挙げられているのは、以下のようなものである。
  - (1) 表現媒体としての視覚と言語の対立説 (H&S 1: 45, 97; Gordon 152-78; Meagher 19-21; Barish 38; Goldberg 57-58; Sharpe 184-190; Limon 91), (2) 思想の対立説 (Yates 121; Hart 109-22), (3) 思想や芸術感は類似していたが私情が絡んでいたとする説 (Strong 155; Orgel and Roy Strong 1:2-3).
  - (1) 視覚と言語の対立説は、ジョンソン自身、ルネサンス図像学の第一人者であり、動く絵画としての大掛かりな可動舞台装置や神話の人物の衣装の考案に積極的に関わってきた以上、説得力に欠ける (Gilbert 3)。また、(2)・(3)の思想の対立・類似説共に、例証が不足している。
- 5) H&S 1: 100; Bradley and Adams 176.
- 6) ジョンソンの引用は、Herford and Simpson, eds., *Ben Jonson* による。以下、"H&S"と略記。
- 7) Marcus Vitruvius Pollio, *De Architectura Libri Decem* (Venice, 1567); Marcus Vitruvius Pollio, *Architectura Libri Decem. Accesserunt Gulielmi Philandri Castilionis annotationes. Adiecta est epitome Georgii Agricola de mensuris et ponderibus* (Lyons, 1586). H&S 11: 599-600参照。
- 8) Daniele Barbaro, *I Dieci libri dell'architettura di M. Vitruvio Pollio* (Venice, 1567). Orrell 33; Smuts 99 参照。
- 9) Johnson は、ジョンソン文学と建築の関係について詳細な研究を行っているが、プラトン主義に傾きすぎ、新アリストテレス主義の本質を把握できていない。
- 10) Ctesibius は *De Architectura* 1.1.7; 9.8.2で、Architas は1.1.16; 9.Preface で言及されている。
- 11) テキストは、Frank Granger ed., *Vitruvius: On Architecture*, 2 vols. を使用
- 12) *Discoveries* 2513-14.
- 13) 『詩学』との関係については後述する。
- 14) "Master-art or science, which prescribes to all beneath it," Lidell, H.G. & Scott, R. *Greek-English Lexicon*.
- 15) *L'Ethica d'Aristotile Tradotta . . . per Bernardo Segni* (Venice, 1551). Gotch 249; Johnson 21-23参照。
- 16) Smuts 165.
- 17) Smuts 165-67.
- 18) *DNB*, "Inigo Jones."
- 19) Smuts 126.
- 20) Smuts 126.
- 21) Smuts 40.
- 22) ただし、トリッシーノ、バルバーロという碩学が側に付いて、非凡な技術をもつ彼に "ratiocinatio" を授け、本格的な建築家に育て上げることになる。福田 55, 40-41参照。
- 23) "To the Memory of My Beloved, The Author, Mr. William Shakespeare, And What He Hath Left Us," *Shakespeare's 1616 Folio*. Yamada, *Ben Jonson and Cervantes* ch. 4 参照。
- 24) Harris and Higgott 17.
- 25) Johnson 19.
- 26) Harris and Higgott 17.

- 27) Gotch 251.
- 28) Gotch 73-74.
- 29) 福田、234-36.
- 30) Hersey.
- 31) Hersey 3.
- 32) "The Roman Sketchbook, Chatsworth," fol. 76 r., qtd. in Harris and Higgott 56.
- 33) Hersey 150.
- 34) Hersey 150.
- 35) Johnson 15.
- 36) ジョンソンはミケランジェロの画家としての伎倆には深い敬意を表していた。 *Discoveries* 1583; "To the Right Honourable, the Lord Treasurer of England, an Epigram" 7, *The Underwood* 77.
- 37) The Roman Sketchbook, Chatsworth, fol. 76 r., qtd. in Harris and Higgott 56.
- 38) Harris 17; Johnson 239. 祝宴館の天井画についての検討は紙面の都合上、別の機会に委ねたい。
- 39) Gotch 14.
- 40) Orrell 186.
- 41) Orrell 3.
- 42) Gotch 13-17; Harris and Higgott 177.
- 43) Harris and Higgott 177.
- 44) 詳細は Smuts 156-57 参照。
- 45) Orrell 186.
- 46) Kernodle 170.
- 47) Johnson 12.
- 48) 『修辞学』のこの部分の重要性については、Yamada, *Ben Jonson and Cervantes* ch. 2 参照。
- 49) アリストテレスとプラトンの決定的な違いについては、Yamada, *Ben Jonson and Cervantes* conclusion 参照。
- 50) Smuts 164; Gordon 174; Hart 16; Johnson 19.
- 51) Johnson 11-12.
- 52) Michael Davis は、伝統に立ち返って『詩学』を『政治学』や『ニコマコス倫理学』の観点から見直し、「幸福な生活」の具現を究極の目的とするアリストテレス哲学の体系に有機的に組み入れることを主張している。
- 53) 詳細は拙論「ベン・ジョンソンと試作の「技術」」参照。
- 54) 福田 230.
- 55) Taylor 89, 99.
- 56) Yamada, *Ben Jonson and Cervantes* ch. 6 参照。1586年に *Britannia* を出版し、地方地誌学上の発見から建国神話を覆した恩師カムデンの業績を、ジョンソンは *Epigrams* 第14歌で讃えている。
- 57) ジョンソンの仮面劇中で最も神秘主義的な印象を与える *The Masque of Queens* (1609) は、実際にはその対極にある。詳細は Yamada, "The Masque of Queens: Between Sight and Sound" 参照。
- 58) *Discoveries* 2382.

## 参 考 書 目

- Aristotle. *Aristotle's Theory of Poetry and Fine Art with a Critical Text and Translation of the Poetics*. Ed. and trans. S. H. Butcher. 1895; London: Macmillan, 1923.
- . *The "Art" of Rhetoric*. Ed. and trans. J. H. Freese. Loeb Classical Library. 1926. Cambridge, MA: Harvard UP, 1982.
- . *The Complete Works of Aristotle*. Ed. Jonathan Barnes. 2 vols. Princeton: Princeton UP, 1984.
- . *Nicomachean Ethics*. Ed. and trans. H. Rackham. Loeb Classical Library. 1926. Cambridge, MA: Harvard UP, 1990.
- . *The Poetics &c.* Ed. and trans. W. Hamilton Fyfe. Loeb Classical Library. 1927. Cambridge, MA: Harvard UP, 1991.
- Barish, J. A. "Ben Jonson and the Loathèd Stage," *A Celebration of Ben Jonson*. Ed. William Blisset et al. Toronto: U of Toronto P, 1973.
- Craig, D. H., ed. *Ben Jonson: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1990.
- Davis, Michael. *Aristotle's Poetics: The Poetry of Philosophy*. Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield, 1992.
- 福田晴慶 『パツラーディオ』 鹿島出版会, 1979.
- Gilbert, Allan H. *The Symbolic Persons in the Masques of Ben Jonson*. 1948. New York, AMS, 1969.
- Goldberg, Jonathan. *James I and the Politics of Literature: Jonson, Shakespeare, Donne, and Their Contemporaries*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1983.
- Gordon, J. D. "Poet and Architect: the Intellectual Setting of the Quarrel between Ben Jonson and Inigo Jones." *Journal of the Warburg and Coutauld Institutes*, 12 (1949): 152-78.
- Gotch, Alfred J. *Inigo Jones*. London: Methuen, 1928.
- Harris, John and Gordon Higgott, eds. *Inigo Jones: Complete Architectural Drawings*. London: A. Zwemmer, 1989.
- Hart, Vaughan. *Art and Magic in the Court of the Stuarts*. London: Routledge, 1994.
- Heinsius, Daniel. *On Plot in Tragedy*. Trans. Paul R. Sellin and John McManmon, Northridge, California: San Fernando Valley State College, 1971.
- Hersey, George. *The Lost Meaning of Classical Architecture: Speculations on Ornament from Vitruvius to Venturi*. 1988. Cambridge, MA: MIT P, 1998.
- Horace, Quintus Flaccus. *Satires, Epistles, Ars Poetica*. Ed. and trans. H. Rushton Faircough. Loeb Classical Library. 1932. Cambridge, MA: Harvard UP, 1970.
- Johnson, A. W. *Ben Jonson: Poetry and Architecture*. Oxford: Clarendon P, 1994.
- Jonson, Ben. *Ben Jonson*. Eds. C. H. Herford, and Percy and Evelyn Simpson. 11 vols. Oxford: Clarendon P, 1925-52.
- Kernodle, George E. *From Art to Theatre: Form and Convention in the Renaissance*. Chicago: U of Chicago P, 1944.
- Limon, Jerzy. *The Masque of Stuart Culture*. Newark: U of Delaware P, 1990.
- Meagher, John C. *Method and Meaning in Jonson's Masques*. Notre Dame, Indiana: U of Notre Dame P, 1966.
- Orgel, Stephen and Roy Strong, eds. *Inigo Jones: The Theatre of the Stuart Court*. 2 vols. London: Sothby Parke Bernet, 1973.
- Orrell, John. *The Theatres of Inigo Jones and John Webb*. Cambridge: Cambridge UP, 1985.
- Palladio, Andrea. *Andrea Palladio: The Four Books of Architecture*. Trans. Isaac Ware (1738), facsimile repr. ed. A. K. Placzek. New York: 1965.
- Sharpe, Kevin. *Criticism and Complement: The Politics of Literature in the England of Charles I*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- Smuts, Malcolm R. *Court Culture and the Origins of a Royalist Tradition in Early Stuart England*. Phila-



- delphia: U of Pennsylvania P, 1987.
- Strong, Roy. *Art and Power: Renaissance Festivals 1450–1650*. 1973. Woodbridge, Suffolk: Boydell, 1984.
- Taylor, René. “Architecture and Magic: Considerations of the Idea of the Escorial.” *Essays in the History of Architecture Presented to Rudolph Wittkwer*. Eds. Fraser, Hubbard and Levine. London, 1967. 81–109.
- Vitruvius Pollio. *Vitruvius: On Architecture*. Ed. and trans. Frank Granger. 2 vols. Loeb Classical Library. 1931. Cambridge, MA: Harvard UP, 1999.
- ウイトルウィウス 『建築書』 森田慶一訳注 東海大学出版会、1979.
- Yamada, Yumiko. *Ben Jonson and Cervantes: Tilting against Chivalric Romances*. Tokyo: Maruzen 2000.
- . “The Masque of Queens: Between Sight and Sound.” *Hot Questrists after the English Renaissance*. New York: AMS Press, 1999.
- 山田由美子 「ベン・ジョンソンと詩作の「技術」」 『英語・英文学のエートスとパトス』 大阪教育図書、2000.
- Yates, Frances A. *Shakespeare's Last Plays: A New Approach*. London: RKP, 1975.

本論は、平成12年度文部省科学研究費補助金（基盤研究B）の交付に基づく研究の成果の一部である。

（原稿受理 2000年10月6日）